

研究動向・近況報告

<教 員>

上田富士子

- 1) 2006年17日より9月20日まで「ケニア・カンバ社会における家族の研究」というテーマでケニアのコースト地域においてフィールドワークを行った。これはカンバ社会の家族についての調査研究の一環して行なったもので、今回は特に最近の祖父母と孫の冗談関係および同一人物観について調査し、詳しい事例を得ることができた。また、カンバ社会の慣習法について、これまでの調査において参加してきた裁判事例のテープをおこしながら、人びとに説明を聞き、裁判の過程を記述することにより、カンバ慣習法の研究を深めることができた。なお、このフィールドワークは「2006年度京都文教大学海外学術調査奨励金」の助成によるものである。この裁判事例のテープおこしと記述は当分続きそうである。
- 2) 「関西在住のアフリカの人びとの暮らしと日本文化観」というテーマで、今年度は関西在住のタンザニア、ケニア、マリの人びとを対象に、彼らの関西における日常の暮らし、母国と日本の慣習や価値観、世界観の違いなどについて調べ、彼らの日本文化観をも明らかにした。この研究は今年度で3年目であり、目下、上述のテーマでまとめているところである。これは科学研究費補助金（基盤研究A「在住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究」、研究代表者：名古屋大学大学院教授和崎春日氏、2004年4月～2007年3月）によるものである。
- 3) 講演：「老いを愉しむ ～ ケニア・カンバ社会にみる人の繋がり ～」というテーマで2007年1月12日、京都文教公開講座の講演を行った。
- 4) 講演会記録：「京都の水・世界の水」 栗山一秀、天野輝芳、嘉田由紀子、人間学研究 vol. 6、pp45～70において、企画・司会の部分を

担当している。

金 基淑

2006年度からの本学大学院文化人類学研究科長としての務めもそろそろ2年が経とうとしている。慣れない研究科の業務に戸惑うことも少なくないが、院生たちとの触れあいは研究テーマや学問的な姿勢の面で学部生とはまた違った意義を感じ取っている。

ここ数年、私が研究テーマとして再び関心を寄せているのは、インドにおける宗教の問題と、植民地時代のことである。「宗教」のことが必ずしも十分に理解されぬまま、特定の宗教が特定のイメージを人々に与え続けている昨今、インドでの数世代にわたるあるクリスチャン家族の宗教的変容を通じてカースト社会における「宗教」の意味やあり方を再度考察したいと思っている。このテーマについては、数年前からフィールドワークを継続中であり、学会（第40回日本文化人類学会研究大会：2006年6月）でその一部の発表を行っている。またこれからしばらくは植民地時代と宗教についても研究を進めていきたいと考えている。まずはミッションの活動を中心に考察していくが、その最初の成果として、キリスト教ミッションとメディアの問題についてまとめている（本学人間学研究所研究紀要第7号、近刊）。これからも教育・業務の傍ら上記の研究テーマについてのフィールドワークを行うとともに、集めた膨大な資料を読み込む日々が続きそうである。

杉本 星子

最近、大学での学びを社会に還元するために、学科プロジェクトである「まな旅」への参画の他、学外の諸活動による地域との連携企画をおこなっている。

- 1) 巨椋池干拓地で活動する「結いの田」や「田んぼ探検隊」との連携によるゼミ生との農業実践
- 2) 京都文教大学のサテライトキャンパス宇治橋通りを利用した、宇治山城地域SNS「お茶っ人」と宇治橋通り商店街との連携活動
- 3) 今春、横浜にあるシルク博物館で開催された「インド サリーの世界」展（国立民族学博物館特別展巡回）への参画および、今秋、福岡国際美術館で開催予定の「インド サリーの世界」展への参画

2006年度—2007年度の仕事

<著作・論文・学会発表など>

2007年3月「ニュータウンのトポグラフィー：向島ニュータウンと巨椋池の記憶をめぐる考察」、京都文教大学人間学研究所紀要2006年, pp.67-78.

2007年6月『『地域まるごとミュージアム』と『巨椋池まるごとミュージアム』の連携—2008年度京都文教大学の地域活動における新たな展開』、平成15年度～平成18年度文科省科学研究費補助金研究成果最終報告書『(人と人を結ぶ) 地域まるごとミュージアム構築のための研究』、橋本和也編、京都文教大学, pp.23-29.

2006年11月「Anthropological, Sociological and Human Geographical Studies: Some Revelations on their Essentiality for Disaster Management, from the Experiences of the Recent Tsunami in South India」, 『International Conference on Natural Hazards and Disasters: Local to Global Perspectives』, 25-27 Nov, at Sri Krishnadevaraya University, Anantapur, India.

2006年11月「Kaleidoscopic Red」(グループ「めぬめバナバナ」メンバーとして染織作品展示構成)、『International Natural Dye Symposium』 Crafts Council of India & UNESCO, 6-12 Nov, Hyderabad, India.

2006年8月「日本の近代製糸業とキリスト教精神」, 国立民族学博物館調査報告『キリスト教と文明化の人類学的研究』杉本良男編, 国立民

族学博物館, pp.71-91.

2006年6月「Socio-Cultural Impacts and Responses in Southeast India」
(共著: Fukao, J., S. Sugimoto, and Y. Sugimoto), 文科省科学研究費補助金研究成果報告書『2004年スマトラ島沖地震津波災害の全体像の解明 Comprehensive analysis of the damage and its impact on coastal zones by the 2004 Indian Ocean tsunami disaster』河田恵昭編, 京都大学防災研究所, pp.147-166.

2006年3月『「女神の村」の民族誌—現代インドの文化資本としての家族・カースト・宗教』, 風響社.

2006年3月「博物館資料の地域文化資源としての活用」, 文科省科学研究費補助金研究成果中間報告書『ひととひとを結ぶ—地域(まるごと)ミュージアム』橋本和也編, 京都文教大学, pp.47-61.

2006年3月「マダガスカルの野蚕・家蚕複合生産:歴史と現状」, 文科省科学研究費補助金研究成果報告書『インド洋海域世界の発展的研究』深澤秀夫編, 東京外国語大学, pp.103-115.

<その他>

2006年9月「プリンセスは更紗がお好き?:マダガスカルにおける布のヒエラルキー」, 『更紗今昔物語:ジャワから世界へ』, 吉本忍 編, 千里文化財団, pp.84-85.

2006年6月「天に昇る寡婦・天を駆ける寡婦」, 『民博通信』, No.113, 国立民族学博物館, p.11.

西川 祐子

定年の2008年三月まで残り一年、京都文教大学での研究生生活を振り返って着地点をさがしているところです。赴任した大学創設当時、今までの研究をここで活かすとうとうじに、今ここでしかできない研究テーマを見つけて、ここでしか出会うことのできない人々と共にそれを深めたい、そのた

めには教室と研究室を楽しい場所にしたいな、と思いつめたものでした。おかげで私の著書のうち『借家と持ち家の文学史』（三省堂、1998年）、『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館、2000年）、『住まいと家族の物語』（集英社新書2004年）などは「ジェンダー文化論」「文学論」の授業と平行した考察からうまれました。共同研究『男性論』（人文書院、1999年）、『京都フィールドワークのススメ』（昭和堂、2003年）にも教室や野外調査の思い出がつまっています。

大学院の授業では、伝記作家としての仕事の経験をいかして聞き取り調査、ライフヒストリーの構築などの課題を中心におきました。京都文教大学図書館の鶴見和子文庫にはライフヒストリーに関する本が多数ふくまれていることをご存知ですか。大学院の演習でそれらの本を使用したことをきっかけに、2006年度から人間学研究所所長を引き受けた機会に「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論の水脈をさぐる」と題した全四回連続シンポジウムを開催しました。学部生、院生をまじえたランチタイムワークショップで毎週、読書会などもつづけています。このテーマに関連する2006年度の著書出版は『戦後という地政学』（東大出版会）です。

すでに私の残り時間はわずかですが、最後まで院生、修士生のみならずとともに創造的な思考を育てる場をつくる仕事に参加しようとおもいます。

橋本 和也

2003年から2006年まで継続した科研費「『(人と人を結ぶ) 地域まるごとミュージアム』構築のための研究」で、地域文化資源や地域について考えることが多くなり、ここ1年ほど「地域性」や「地域文化」についての研究を始めた。この概念を中心に最近の研究は2つのテーマに広がっている。一つは「地域性」や「地域文化」をアピールする観光の人類学的研究であり、二つ目はフィールドワークをとおして人類学がどのように地域に貢献できるかという研究である。

観光研究は、観光人類学の影響を受けて他分野で活発になってきている。

宗教学会では2006年に「宗教と観光」のシンポジウムが開催され、2007年には「宗教と社会」学会でもシンポジウムがもたれた。その2つに私はコメンテーターとして参加した。2007年には神戸大学国際文化学部の異文化研究交流センター（Intercultural Research Center）が主催で『オセアニア、カリブにおける観光開発と文化』が開催され、発表者となった。文化人類学会でも2007年には私の知る限りで観光関連では4件の発表があった。私は「地域文化観光論 ―真正性の議論を超えて―」というタイトルの発表をした。

フィールドワークをとおしての地域貢献については、「地域まるごとミュージアム構築のための研究」の最終報告書に「課題発見・実現型、社会関係構築型の取り組みについて」というタイトルの論考を載せた。人類学的フィールドワークで地域に貢献する方法は、先ず社会的な信頼関係を構築することが重要であり、その後地域での課題を地域の人々とともに発見し、それを実現するプロセスが大切である。外部で組み立てた企画を当該地域に持ち込み、短期的な成果を得ることではないことを強調している。

「文化人類学的フィールドワーク」に関しては、文化人類学会でのプロジェクトも動いている。社会調査士認定機構への文化人類学会の参画を予定して「社会調査士標準カリキュラム検討委員会」が学会内に発足し、在校生の就職などを考えて私も参加している。しかし認定機構が法人化を急いでおり、他学会の参入を凍結したことにともない、方向が変更した。この検討委員会では、「質的調査」と言われるものと「フィールドワーク」との類似点・相違点の検討が行われた。そして文化人類学としてはどのようなスタンスを取るべきなのか。「質的調査」の範疇の中に「フィールドワーク」が包括されるのか。それとも別の展望のもとに「フィールドワーク」を位置づけるべきかといった議論が行われている。文化人類学科および文化人類学研究科にとって重要な問題が検討されている。

松田 凡

2006年度は、最近の研究テーマのひとつである「文化人類学的フィールドワークが教育にどのように役立つのか」について、いくつかの考察をすすめることができた。まずは、2006年8月にカンボジアへ短期の出張をし、日本のNPOによる学校建設の現場で、代表者や先生たち、学生たちに話しを聞くことができた。ヴェトナム国境に近いプレイベン州にある「カンボジア-日本友好学園」がそれで、カンボジア側代表のコン・ボーンさんと、日本側代表の阿木幸男さんに、設立の経緯から運営の苦労、公的資金の活用方法などについて意見をうかがった。これをエチオピアでの学校建設とそれをめざす授業にどう役立てるかは次の課題である。この「プロジェクト・ウオプル」については、国立民族学博物館監修の『季刊民族学』に「朝飯前の人類学」と題したエッセイを8回の連載で載せる企画が進んでいる。学生がエチオピアで実習する姿を下敷きに、人類学に入門するそのまた一歩手前のギモンに寄り添うことを意図した。現在、第2回までが出版され、第3回の原稿を執筆中である。

その他、『世界地名大事典』（朝倉書店）、『講座世界の先住民族』（明石書店）にも原稿を書いたが、ともに未刊である。今年度刊行されたのは次の1点のみ。

■「森に棲むナマズの力」、国立民族学博物館編集『月刊みんぱく』10月号、2006年、pp.20-21。

< 修了生 >

稲垣 諭

すばらしい出会いとめぐりあわせが重なって、2006年2月より千里文化財団という団体に働いています。千里文化財団は、大阪の万博公園にある

国立民族学博物館（ちぢめて「みんぱく」）の友の会の運営などをおこなっており、機関誌『季刊民族学』も当財団が発行しています。

私は出版部に所属し、『季刊民族学』をはじめとする雑誌・書籍の編集をおこなっています。『季刊民族学』は文化人類学（民族学）についての雑誌ですので、母校でお世話になった先生方にも毎号のようにご寄稿いただいています。学生時代は先生方にレポートや論文の提出を追い立てられていましたが、逆の立場となってしまいました。そのほか、万博公園の森に関する広報誌や、みんぱくカレンダー、みんぱく特別展図録の一部などもつくっています。ちなみに『月刊みんぱく』という雑誌は、みんぱくが編集・発行しており、うちの人間が編集補助として一人出向しています。

勤務しはじめて一年と半年ほど経ちました（2007年7月現在）。まだまだ一人前とはいえませんが、上司や先輩にフォローをいただきながら担当記事を持たせてもらっています。ともすれば仕事場にこもりっぱなしになってしまうので、研究会に出たり、旅行に出かけたりと、なるべく外の刺激を受けて、自分の糧としていきたいです。

みんぱくや友の会、『季刊民族学』も今年で30周年。自分と同じ歳の雑誌の編集に携わることができたことに、少なからず「縁」のようなものを感じています。『季刊民族学』は、会員のみ頒布とはいえ一般の方々向けの雑誌なので、文化人類学の営為を一般の方々に伝えるということはどういうことなのだろうか、自分がどのようにかわれるだろうかということ意識してとりくんでいきたいと思っています。

阪本真奈美

「妖怪と人間の関係」、これだけ聞くと、昔話の中の「鬼が人里を襲う話」や「狐が人を化かす話」などを連想するかもしれない。確かにそれらの御伽噺も楽しいが、私に関心を持って研究対象としたのは、「現代における妖怪伝承の動向から生まれる人間との関係性」である。

修士論文での調査地は大分県の臼杵で、その地の妖怪伝承について、ま

た臼杵で妖怪の話がどのように語られているのかなどを調べた。臼杵には妖怪の話や報告例が驚くほどに多く、「私の地元にもそんな伝説があれば」と少々羨ましく思ったものである。

私の地元には、そのような民間伝承はなく、と思っていたのが、調べてみればあるものである。

50歳ほどの人が、「子供の時にガタロ（河童の一種と思われる）を見た」と言い、その姿について詳細に語ってくれたのである。妖怪の目撃例など、お爺ちゃんのお爺ちゃんが〜ばかりの中で、これは最近過ぎるようにも思ったが。また、「夕方になってギャーゴォ（正体不明）が鳴き出したら、怖いから皆家に帰った」、「ギャーゴォの鳴き声を、仕事（農作業）をやめて家に帰る合図にしてた」など、驚くべき情報を得ることもできた。まるで遠野物語の世界だが、いずれも50年足らず以前のことである。そんな最近まで、妖怪が身近なものだった地域もあるのである。

それらの話を聞いて、このような話は地域の文化資源として残していかなければならないと深く感じた。臼杵の人たちも、このような使命感に燃えていたところもあったのではないだろうか。臼杵だけでなく、どの地域でも、どの研究分野でも、皆多かれ少なかれ「これは大事なことだ、忘れさせてはいけない」と考えているのではないだろうか。

私はもう修了だが、それは学校から去るだけで、研究などから去るわけではないことを、実感した。これから地元にも目を向ける形で、妖怪伝承と人間の関係について考えていこうと思う。

かくいう私も10数年ほど前にギャーゴォの声聞いたことがあるので、今度はガタロを探してみようかなどと考えている。

佐藤 量

2005年度修了生の佐藤量です。京都文教大学大学院文化人類学研究修了後、立命館大学大学院先端総合学術研究科博士後期過程・公共領域に進学しました。進学後は修士課程での研究を深化させ、中国大連市の都市再開

発を植民地主義とグローバル・シティの観点から考察しています。最近の活動としては、2006年9月に韓国・ソウルで漢陽大学と立命館大学の合同シンポジウムに参加し、11月には立命館大学にて「植民地主義とグローバル化」をテーマとした連続講座でコメンテーターを務めます。大連のフィールド調査や東京・福岡でのインタビューも継続しており、2007年夏からは1年間の大連留学を予定しています。日々立命館の院生たちと切磋琢磨しながら、博士論文執筆を目標に元気に過ごしています。

谷本 圭

「研究動向・近況報告」執筆依頼の手紙を受けとり、もう見慣れてしまった通勤電車から淡々と流れる景色を眺めながらあの有意義でマイペースだった学生時代を思い出した。大学院を卒業してから東京に住み、都会の波に飲まれ、過去を振り返る間もなく社会人として忙しく働き3ヶ月がたった。学生時代とは違い、仕事は研究活動のようにマイペースで進めることができず、奮闘する日々が続いている。

研究活動としては、仕事に就く前に、友人が四国遍路に行くというので、遍路に少しだけ同行した。何度も調査で歩き続けた遍路道は調査したあの頃とかわらず、日常の日々とは違う時間と世界が流れていた。そこに行けば何かが変わる、又、何か成し遂げたいと思う若者たちや、仕事の休みを利用して四国の自然や歩く時間を楽しもうとする人たち、それぞれの思いが交錯する遍路道。何度、遍路を歩いてみても、地元の人たちがお接待でお遍路さんを迎えてくれる。それはいつも不意にやってくる。日常の何気ない単調な日々慣れてくると、歩きながら見る四国の景色、そして予想外のお接待は、良い刺激となり日常での生きる力となっていくと改めて実感した。

毎日仕事に追われ休む暇もなく働き続けていると、心に落ち着きと余裕が持たなくなってしまう事がある。そんな時、遍路やこれまでの旅で体験したことや考えたことを思い出し、心のバランスを取り戻すようにしてい

る。しばらくそんな日々が続き、ようやく、最近は仕事が落ち着き生活のリズムに余裕がでてきた。しかし、余裕がでてくると、やはり世界に旅立ちたいと思ってしまう。私の旅の病はまだ完治していないようだ。次の旅立ちはまだ未定・・・

中森 陽介

nyol@ares.eonet.ne.jp

- ・大学院を終えて、私は社会人になりました。就職先は医療カルテを専門的に取り扱うソフトウェア会社でした。
- ・入社して1月ほどは座学でソフトウェアの講習を受けていました。その研修中に同期と話をしていたのですが、文系出身者は少なく、周りは理系の人がばかりでした。
- ・5月頃から早速、実地研修が始まり、弊社のソフトウェアを導入していただくユーザー病院さまに出向き、システム導入のお手伝いを先輩社員と共に行っていました。多くの病院関係者の方々の要望をヒアリングしながら、システムを導入していく必要があるので、文化人類学で培った聞き取りの技術は役に立つと思いました。また、全国各地のユーザー先に出向くので旅を苦にしない人に向けた職業だと感じました。
- ・現在、正式に配属された部署は全国のユーザー先に毎日飛び回る出張の多い部署になりました。まだ配属が決まったばかりで、まだほとんど出張していないのですが、これから旅鳥の毎日が始まります。体に気を付け、何とか早く一人立ちできるように成長していきたいと考えています。

中林 基子 【旧姓・浦井】 ホームヘルパー

2002年9月に大学院を卒業してから、早いもので、5年が経とうとしています。

多くの方々の協力の下になんとか完成をみた修士論文では、「介護保険制度施行の前と後～ホームヘルパーの家事／『家事援助』労働～」というテーマで、介護保険制度施行の前と後では、「家事労働」の社会的位置づけと評価がどのように変化するのかを考察しました。私が行った介護保険制度施行1年後の調査からは、ホームヘルパーが行う「家事援助」労働の専門性について、社会的に認められ、正当な評価を受けているとはいえませんでした。

私の研究は、当初、ホームヘルパーとその家族の他に、被介護者とその家族の生活の変化をも研究する意図をもっていました。しかし、個人の私領域とされている家庭空間の調査にはさまざまな限界があり、実際のホームヘルパーではなかった私には、調査をすることは困難でした。この時点で、私は、研究のつづきを、私自身が介護の現場で働きながら考えるテーマとすることにしました。

フィールドワークの一環で、ホームヘルパー2級課程養成研修に参加、資格を取得していた私は、卒業後すぐに、ホームヘルパーとして働き始めました。実際にホームヘルパーとして身体介護や家事援助を行うようになってみると、修士論文で考察したホームヘルプ労働の専門性について、私自身、より深く理解できるようになったように感じます。なにか特別なことができるわけではないけれども、相手の病状や意思に寄り添いながら、被介護者とその家族の心身両面に向けて自立支援を行うことが、私たちホームヘルパーの仕事です。この自立支援のために、ホームヘルパーが行うすべての介護労働と家事援助労働は、十分に、専門性がある労働である、と私は考えます。

ホームヘルパーとして働く傍ら、2002年6月から一年間、東海ジェンダー研究所より助成を受け、「家庭の主婦からホームヘルパーへ—介護保険制度施行の前と後—」というテーマで執筆、2003年12月、同研究所より出版された『ジェンダー研究 第6号』に掲載して頂きました。

昨年3月に結婚し、一度現場から退きましたが、今年2月、現場に復帰しました。今年度は介護福祉士、来年度はケアマネージャーの資格取得を目標にしています。

大学院を修了した後ホームヘルパーとして働いた3年半の経験と、一度現場を離れた時間は、私を少し成長させてくれたように思います。今後は、これまでの経験といま現場で働いている立場を活かし、このような機会があれば、考えを文章にまとめていきたいと思っています。

水井 久貴

2005年3月に修了し、翌4月から文化人類学科の教務補佐の職に就いてから丸2年が経過した。教務補佐の主な仕事は学科の必修科目である「フィールドワーク実習」の事務作業や学生へのサポート、実習先への同行などである。しかし、自分の仕事を鑑みるとそれ以外にも演習等の希望登録科目の振り分け作業や、学科予算事務、学科図書事務、オープンキャンパス担当、学生の就職相談など大学事務局にある各課の業務をなんだかの形で担当している。

大学院修了後の活動を少し述べさせてもらおうと、2005年3月に出版された本学紀要『京都文教文化人類学研究第2号』に修士論文の改良版が掲載された。2006年度は本学人間学研究所主催で開催された連続シンポジウム『鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫』のポスターの写真を担当した。また、フィールドワーク時に撮影した写真などを出品した写真展『対話と表象』を大学写真部時代の友人と共同で開催した。2007年度は教務補佐としての契約が終了する最終年度となるが、就任初年時より担当しているフィールドワーク実習科目「プロジェクト・ウオプル ～エチオピアに小学校を建設する～」(松田凡教授担当)においてプロジェクト過去5年間の活動の集大成である「ウオプル・クロニクル」というイベントを11月ごろに開催すべく、現在準備作業中である。

水口 良樹

今年度は、当初行く予定であったペルーへは結局行けず仕舞いになってしまったが、いろいろ新しいこともあり、意義深い年でした。

まず在日ペルー人のコミュニティ誌『KYODAI』に二度ほどペルー音楽に関する記事を書いた。「ペルー音楽の理解と普及を目指して」と「独立記念フィエスタでクリオーヤ音楽に酔いしれる」という記事だ。また、ペルー音楽に関する記事としては2004年からNGO団体日本ラテンアメリカ協力ネットワークの会誌『そんりさ』に連載している「音楽三昧ペルーな日々」も、今年度末で第14回を数えた。昨年度に提出した「都市移民の音楽嗜好からみる世代間の意識変化：ペルー山岳都市クスコにおけるワイノ音楽を事例に」が本誌『京都文教文化人類学研究』の前号に掲載されたのも今年度でした。また、日本ペルー協会の主催で、6月には「ペルーのアンデス音楽曼陀羅」というタイトルで特別ステージを設けて生演奏付きの講演会をさせていただいた。ペルー協会では2004年以来毎年ペルーの音楽についての講演会をさせていただいている。また、東京大学の石橋純先生にお誘いいただき、国際交流基金による中南米理解講座の『中南米の音楽：民衆の歌・大地のひびき・雑踏のリズム』という連続講座の第五回「アンデス諸国におけるローカル音楽の発展」を担当させていただいた。ペルー以外のアンデス諸国の音楽文化についても広く話してほしいということで、いろいろ勉強するよい機会となった。その他、人類学、ラテンアメリカやメキシコ関係などの2、3の勉強会などにも顔を出しながらぼちぼちと勉強を続けている。特に最近は関東周辺の在日ペルー人の人たちと徐々につながりができてき始めているので、そのあたりも注目していきたいと思っている。

米田 量

学部のときは、個人の中にある心の仕組みについて、関心がありました。

修士で四国88か所巡りをテーマにしているときに、心の構造を頭で解析しようとするよりも、個人にとっての「居場所」があれば、人は意識もせずに自分を変化させる行動を適切にとって、変わっていくと思うようになりました。「居場所」は物理的な居場所のときもあり、人間関係のなかにある居場所のときもあります。

最近、生涯教育ではないですが、人間はどんな時も育まれていかなければならない、と思っています。生きていくなかで、変化の必要が出たときに、育まれる場所が奪われていると、人は救われない地縛霊のように非常に無残なものになってしまうと思うからです。

はるか昔は、60年や100年生きるなどという前提の上での生活はなくて、人間はその日その日を生きていたのですが、今の時代はそれが前提となって、「人生」という「文化」が出来ています。しかし、そんな文化というものに対して、人間の遺伝子はそれほど対応していなくて、人はみんな未来という呪縛を引き受けながらも、でもやっぱり今いる環境のなかで、その日その日を生きてしまうことしか出来ないし、そうする以外の能力は、遺伝子的には備わっていないのではないかなと思ったりしています。想像ですが。しかしそれでも生きていくので、そういう文化にも適応していくために、また新たな文化や工夫の創造が必要になってくる。その工夫を考えていきたいなと思い、途中の説明を省きますが、結論として、槇島で「結いの田うじ」という無農薬米作り企画をやることにしました。田植え、草取り、収穫をみんなでします。関心ある方は、ぜひS、S先生に声をかけてみてください。

<在學生>

佐々木志穂（修士課程2年）

大学院に入学して、もう1年以上が過ぎたことに気づき、最近、月日の過ぎる速さに驚いています。入学当初は、新しい環境に慣れることに毎日

が必死でした。もちろん、現在も授業や自分の研究テーマについて試行錯誤しています。今回、はじめて研究動向というものを書かせていただきました。研究動向といえるものをどうやって文章にすればよいのか、何が書けるのかなど散々悩みましたが、なんとか書いてみました。

私は、農山村への都市からの移住者（Iターン）と地元の人との関係、田舎ブームについて取り組んでいます。大学院で初めてフィールド・ワークを行いました。事前準備の大変さを知ると共に、実際に移住者の人がいる地域へ行き、調査を行っているのですが、調査を行うときの方法や注意点など授業で学んだことは、たくさんありましたが、実際に調査地に入り、人を前にすると緊張して頭の中は真っ白になってしまうことが多々あります。調査が終わり、内容を整理するたびに、「もっとこの事柄について聞けばよかったのに」とか、「誘導尋問的な質問をしてしまったかな？」など反省することもあります。これまでに調査に協力してくださった方は、皆さん親切な方ばかりで、私の質問に丁寧に答え、お話しをしてくれました。予備調査地・調査地では、移住者の方にお話を聞かせてもらえ、役場の方とお話させてもらえました。そうするなかで、調査を始める前に立てていた自分の研究テーマと調査地で行われていることのズレに気づき、調査地で知った現実と私の立てていた研究テーマのズレについて見直し、新しく研究内容を考えながら、現在、調査と文献研究に取り組んでいます。

鈴木 智子（修士課程2年）

卒業論文でディズニー流の結婚式についてフィールドワークを終えてから早、1年半が過ぎようとしている。大学生の頃、必死で仕上げたつもりになっていた卒業論文ではあったが、今思えばいかに「つもり」であったのかがよくわかる。そのリベンジというわけではないのだが、修士論文において新しいスタイルの結婚式を挙げる若者の意識について調査しようと考えた。

近年の結婚式ではしきたりや画一性よりも、個性やオリジナリティーを

重視する結婚式、その中でもとりわけハウスウェディングと呼ばれる豪華な洋風の邸宅を借り切って挙式や披露宴を行うスタイルが人気になっている。

ハウスウェディングでは新郎新婦の思いを形にするウェディングプランナーが重要な役割を担うことが多いことから、私はプランナーの方々と話を聞く機会をもたせていただいた。私のインタビューの稚拙さもあって当初はなかなかはかどらないこともあったけれど、カウンセラーをも兼ねているプランナーの方々の話術のおかげで私の聞きたいことを上手く引き出してくれた。その事が大いに今の調査に役立っている。

この経験をいかして、実際に結婚式にも参加し新郎新婦にも話を聞くことで、ハウスウェディングが人気になった要因の一端をみる事ができたと思う。

川勝 吉晃（修士課程1年）

卒業論文では、都市伝説（Urban-Legend）を独自に分類するという形で、主だった語り手である10代後半～20代前半の若者たちを相手にフィールドワークを行ったが、書き上げてから1年以上の時間が経過している事を差し引いても、満足な完成度とはとても思えない出来であった事が、今なら分かる。特に致命的なのが、論文の肝になる都市伝説の分類に関して、独自の視点を優先しすぎたせいで、決定的に先行研究が足りていなかった事にある。

そこで修士論文では、こういった先行研究を改めて勉強し直し、かつて収集した都市伝説と新しく収集した都市伝説を、昔語りや口承文芸と比較・分類しようと考えている。

近年、インターネットの発達により、情報の拡散速度が格段に上がった。それに比例して、ネット上を中心に都市伝説は増殖し、様々な形で語られるようになっていく。

こういった都市伝説を語る人々から直接話を聞くために、フィールドワー

クには卒業論文を執筆していた時から訪れていた場所を選んだ。1年近く調査から離れていたため、最初は戸惑いもあったが、自分の知っている話を語りなれている人が多く、助けられる場面が多かった。

今回、先行研究を勉強し直してフィールドワークを行った事で気づいたのは、都市伝説を語る人々の多くは、専門的ではないにしても、その多くが自分たちの語る話に独自の分析を加えている、という事である。今後の研究において、重要な要素になるのではないかと思われる。